コレンテ　vol. 45　n.415　gennaio 2025

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

**カルヴィーノとアーティチョーク㊾**

## ＊イタロ暁に死す＊

**堤 康徳**

　その死はあまりにも突然に訪れた。イタロ・カルヴィーノが 1985 年 9 月 19 日未明に脳出血で死去したのだ。享年 61。あとひと月足らずで 62 歳の誕生日を迎えるはずだった。当時フィレンツェ大学に留学していた私は、9 月 20 日付けの『レプッブリカ』紙でその訃報に接した。その紙面はまだ私の手元にある。1 面でカルヴィーノの死を短く報じ、さらに 4 面から 9 面にかけてカルヴィーノの追悼記事を組んでいる。ウンベルト・エーコ、マリア・コルティ、アルベルト・アゾル・ローザらの作家や批評家が寄稿している。『スタンパ』、『コッリエーレ・デッラ・セーラ』などの有力紙も同様にその死を大きく扱っていた。

la scomparsa di Calvino

Il suo mondo immaginario si muoveva con delicato equilibrio, tra Leibniz e Voltaire

'Allora tanto vale che mi conceda un riposo millenario'

di UMBERTO ECO

PAGINA 6 la Repubblica venerdì 20 settembre 1985

Telegrammi di cordoglio alla vedova dai presidenti delle due Camere

Il lutto dello Stato Cossiga a Siena per l'ultimo saluto

　『レプッブリカ』紙 6 面には、イタリア共和国大統領フランチェスコ・コッシーガが、作家が息を引き取ったシエナの病院を昨日のうちに訪れ、最後の別れを告げたと書かれている。そのさい大統領は未亡人に、「公職にある者はときに空虚に響く言葉を弄することがあります。だからこそ私は私的な訪問としてここに参りました。私はあなたの夫の熱心な読者です」と述べたという。同じく 6 面に掲載されたエーコの追悼文を読んでみよう。

　『木のぼり男爵』が世に出たとき、私たちは彼よりも 10 歳年下でした。私たちは、カルヴィーノが私たちの世代の作家であることを理解しました。その後、私は彼と知り合う機会を得ました。その曖昧でからかうよう微笑みと、皮肉の閃光を隠すためか目を伏せる話し方に欺かれそうになりました。しかし、『ある投票立会人の一日』を読んだとき、私は確信したのです。あのように百科全書的な精神に近い作家が、この短い小説によって、かつて読んだこともないほどの最高の宗教性をもつテクストのひとつを著したのだ、と。このテクストには、すでに宇宙的な着想があり、のちの作品でそれが奇想天外なかたちで表明されていくことになるのだ、と。（中略）

　今はどうしても個人的な思い出を避けて通れません。1959 年に知り合って間もなく、カルヴィーノから、ある音楽雑誌で開かれた作品にかんする私の記事を読んだと言われました。その記事に関心をもった彼は、同じテーマで本を書かないかと尋ねました。その後、偶発的な理由から私は本を書きましたが、別の出版社から刊行されました。しかし、カルヴィーノの励ましがなければ、私はその仕事を始めなかったにち

がいありません。こんなことを言うのは、無関心でよそよそしい仮面の下で、彼がいかに他者を勇気づけ、助ける用意ができていたかを理解してほしいからです。偉大な小説家としてだけではなく、文化を推進する寛大な人物としてのカルヴィーノを私たちはいま追悼せねばなりません。この数十年の文化界において彼は余人をもって代えがたい存在でした。

彼の想像世界は、ヴォルテールとライプニッツのあいだを繊細なバランスを保ちながら動いていましたが、そんな彼について、その啓蒙主義的で形而上学的な優雅さを尊重しながら、どのようにしたら彼が嫌うかもしれない悲愴感を帯びずに語ることができるでしょうか？

私には、短篇「ティ・ゼロ」の一節を再読する以上にふさわしい追悼はないと思われます。そこには、別の場所への移動を決断し、受け入れ、それを理性と空想にたいして透明にする必要のある、いつ来るやもしれないあの瞬間について、みごとに考察されているからです（Umberto Eco, *Allora tanto vale che mi conceda un riposo millenario*, in «la Repubblica», 20 settembre 1985）。

そしてエーコは、その一節を引用して追悼文をしめくくる。「ティ・ゼロ」（$T_0$は時刻 0 を表す記号）は短篇集『ティ・ゼロ』（*Ti con zero*, Torino, Einaudi, 1967）の表題作である。この短篇には時間と空間をめぐる数学的・物理学的な考察が展開されている。登場人物はハンターの「私」と、「私」に襲いかかってくるライオン。「私」は、ライオンめがけて弓から矢を放ったばかりである。書き出しの一文は「このような状況に私が置かれるのは初めてではないような気がする」（*Ti con zero*, Torino, Milano, Mondadori, 2002, p. 85）である。「時間は通過した道を引き返し、時間の鎖は逆方向に巻き戻され、始点に到達してからまた同じ歩みが再開され、それが際限なく繰り返される」（*Ivi*, p. 89）。したがって、ハンターがライオンと対峙するこの危機的な状況も、幾度となく繰り返されてきたことになる。だからこそ、「このような状況に私が置かれるのは初めてではないような気がする」のであろう。

本短篇は、射撃の名手であるパルチザンの少年が登場する初期の短篇「最後に鴉がやってくる」を想起させる。少年の銃弾は、狙った対象との距離を一瞬のうちに無化する。「ティ・ゼロ」においては、ライオンとハンターの距離と、矢がライオンに到達する時間は無限に分割される。この短篇は、ゼノンのパラドックス「アキレウスは亀に追いつけない」と「飛んでいる矢は止まっている」をカルヴィーノが独自に具現化したものとも考えられる。

エーコによる引用箇所には、こう書かれている。「私は自問する、この地点にいずれにせよ戻らねばならないなら、私がここに立ち止まっているべきではないのではないか、時間と空間のなかに立ち止まっているべきではないのではないか、と」。「これを続けることがいったい何の役に立つのか、遅かれ早かれ私たちがこのような状況に再び出くわすことになるなら？　それならば、数百億年のあいだ私は休息をとり、私以外の宇宙全体に時空の歩みを継続させ、その帰路の旅を待つほうよいのはないか」（*Ivi*, p. 90）。エーコは、このくだりを、「別の場所への移動」（il passaggio all'Altro）を決断するあの瞬間についてのカルヴィーノ一流の考察と考えた。Altro の A が大文字であることからも、それが冥界への旅を示唆していることがうかがえる。エーコによるカルヴィーノ追悼記事に、「それならば千年の休息を取るほうがよいだろう」（Allora tanto vale che mi conceda un riposo millenario）という見出しが付けられている所以である。ただし、休息期間は数百億年から千年に変更されてはいるが。

この追悼文で言及されているエーコの著作は、1962 年にボンピアーニ社から出版された『開かれた作品』（Umberto Eco, *Opera aperta*, Milano, Bompiani, 1962）である。カルヴィーノは、自らが顧問を務めるエイナウディ社からの刊行をエーコに提案していたのだろう。

『ある投票立会人の一日』については、本コラム第 4 回と第 5 回で取り上げたので、お読みいただければ幸いである。

パリを離れたカルヴィーノ一家は、1980 年 10 月より、ローマ中心部のカンポ・マルツィオ地区に居

を定めた。夏のあいだは、トスカーナ州グロッセート県ロッカマーレにある海辺の別宅で過ごすのが常だった。カルヴィーノが倒れたのはこの別荘である。作家はこの時期、1985 年秋から予定されているハーヴァード大学での一学年間の講義の準備に追われていた。カルヴィーノがハーヴァード大学から、チャールズ・エリオット・ノートン詩学講義を依頼する招待状を受け取ったのは 1984 年 6 月。エステル夫人によれば、アメリカに出発する前には、6 回の講義のうち 5 回分を書き上げていたという。だがその講義が実現することはなかった。作家の死後、夫人が発見したタイプ原稿を再現して出版されたのが『アメリカ講義』（*Lezioni americane*, Milano, Garzanti, 1988）である。

長らくエイナウディの編集に携わり、カルヴィーノとも親交のあった作家のエルネスト・フェッレーロによれば、フランツ・カフカの『アメリカ』新版のために、彼がカルヴィーノに序文を依頼し、カルヴィーノは、ハーヴァード大学での講義の準備が終わりしだいこの序文に取り組むことになっていた。その打ち合わせのために、フェッレーロはロッカマーレに滞在中のカルヴィーノに電話をかけた。1985 年 9 月 6 日、金曜日の午後のことである。しかし、昼食後にヴェランダで新聞を読んでいたカルヴィーノは、突然頭を手で押さえ、その場に倒れたという。カルヴィーノはまず、救急車でグロッセートの病院に運ばれた。しかし、病状の深刻さゆえに、そこから約 70 キロ離れたシエナのサンタ・マリア・デッラ・スカーラ病院に搬送されたのである。翌土曜日朝、6 時間に及ぶ手術が行われたのち、蘇生室で処置を受けた。一時は娘のジョヴァンナと言葉を交わすなど（「私は誰？」と尋ねる娘にカルヴィーノは「亀」と答えたという）、意識回復の期待を抱かせたが、19 日未明ついに帰らぬ人となった。

棺は病院一階の 15 世紀のフレスコ画で装飾された「巡礼の広間」に安置された。シエナ大聖堂前にある病院のこの広間ではかつて、ヴィーア・フランチージェナ（Via Francigena:フランク人の道）を通ってローマを目指す巡礼者たちを迎え入れたという。カルヴィーノの弔問に訪れた人々もきっと巡礼者のようだったのだろう。フェッレーロは、「みんながやって来た、政治家、編集者、作家、記者、友人たちが」と回想している。

カルヴィーノは、ロッカマーレから東に 3 キロほどの距離にあるカスティリオーネ・デッラ・ペスカーイアの小さな墓地に、2018 年に死去した妻エステルとともに眠っている。墓地はティレニア海を臨む小高い丘にある。

カルヴィーノの死後、今日にいたるまで、さまざまな国でこの作家にかんする書物が出版され、幾多の国際会議、シンポジウム、セミナーが開催されてきた。

1993 年 10 月 15 日、北イタリア・ブレシャ近郊のバッサーノ・ブレシャーノ天文台が発見した小惑星にカルヴィーノの名が冠せられた（正式名称は 22370 Italocalvino）。惑星発見日がカルヴィーノの誕生日だったことに因むと思われる。存命ならば作家が古希を迎える日である。カルヴィーノの評伝を 2020 年に出版したスペインの詩人アントニオ・セラーノ・クエトは、この天文台からの贈り物以上に、『レ・コスミコミケ』の作者が気に入るものはなかっただろうと書いて評伝をしめくくった。

カルヴィーノが学んだサンレモの「ジャン・ドメニコ・カッシーニ高校」が、作家と同じリグーリア地方出身の天文学者(Giovanni Domenico Cassini, 1625 – 1712)に因む名前であることがあらためて思い出された。同級生には、『レプッブリカ』紙創立者のジャーナリスト、エウジェーニオ・スカルファリ(Eugenio Scalfari, 1924–2022)がいた。

参考文献

Erenesto Ferrero, *Italo*, Torino, Einaudi, 2023.
Antonio Sarrano Cueto, *Italo Calvino. Lo scrittore che voleva essere invisibile*, Milano, Mondadori, Traduzione di Giuliana Carraro e Eleonora Mogavero, 2023.（スペイン語原著: *Italo Calvino. El escritor que quiso ser invisible*, Fundación José Manuel Lara, 2020.）
イタロ・カルヴィーノ『カルヴィーノの文学講義―新たな千年紀のための六つのメモ』（米川良夫訳、朝日出版社、1999 年）。
――『柔らかい月』(脇功訳、河出文庫、2003 年）

（イタリア語講師）

# ＊春のイタリアで放たれた 2つの「ブーメラン」＊

山田 晃裕

2025 年に入り、3 月・4 月とイタリア行きの機会に恵まれた。3 月は会社として、カルチョを愛する経営者の皆さんを対象としたツアーを初めてコーディネート＆アテンド。そして、4 月は毎年恒例のパスクアにロヴェレートで開催される国際大会出場をメインとした、トレンティーノの地における大冒険のハナシ。今回は 3 月のツアーで起こった 2 つの「出会い」にフォーカスして、（毎度のことで恐縮だが）旅の魅力について話していきたい。

<初の社会人ツアー【SCOPERTA 2025】>

3 月 15 日から 6 泊 9 日のスケジュールでイタリアへ。社会人を対象にしたツアーのコーディネートは初めての経験だったが、ミラノとブレシアを中心に幅広くフットボールの現状を見てもらう企画を盛り込んだ。ツアータイトルに選んだのは、【SCOPERTA（発見）】という言葉。それもこれも、視察先で見た景色だけでなく、聞こえてきた言葉・抱いた感覚から、それぞれのフィールドで生きる「発見」を促したいという思いがあったから。

メインテーマは自分自身の得意分野でもある「人材育成」。これまで培ってきたつながりをフル動員し、AC ミランを筆頭にトップカテゴリーのクラブから、人口 1 万 4000 人の小さな町・オスピタレットにある、100 年以上の歴史を誇るセリエ D クラブ（※先日セリエ C への昇格が決定）のほか、選手全員がインフルエンサーという独自の取り組みを打ち出すミラノ郊外の新興クラブまで、プロアマ問わずさまざまなクラブの取り組みを見て回るツアーとなった。

どのクラブもいい人材を発掘し、より良い形で育てていきたいという思いがある。そのアプローチ・出口戦略はさまざまで、私個人としても通訳をしながらもいい学びの機会になった。日本からこの機会に思いを馳せて参加いただいた皆さんにとっては、何事も読めないイタリアにストレスを感じたこともあると思う（滞在 6 日間で 2 度のストライキに出くわすとは思いもしなかった！）。予期せぬ事態の連続で流石に冷や汗をかいたが、無事にすべてのコンテンツを消化することができた。

<地下鉄の中での出会い>

さて、このツアーの目玉でもあったのが、3 月 20 日に、サン・シーロスタジアム（ミラノ）で開催された UEFA ネーションズリーグ・イタリア代表 vs ドイツ代表の一戦（ミラノにいながら AC ミランの試合を観戦しないというのも珍しい）。平日夜のキックオフながら、スタジアムへと向かう地下鉄車内は、すでに酒に酔っているドイツ人サポーターとイタリア人サポーターでごった返していた。

スタジアムまであと一駅というところで、突然英語で声をかけられた。振り返るとそこにはイケメンが…。「日本人ですか？」というありがちな質問が飛んでくる。

名前はヤコポ。聞けば、ミラノで生まれ育ち（もちろんサッカー少年として）、お父さんの仕事の都合で 13 歳でニューヨークに移住したんだとか。「ミラネーゼとニューヨーカーのハーフ」である彼が、「日本に NY でできたベストフレンドがいて、再来週に日本に行くんだよ」と言うのである。

途中からやり取りはイタリア語にシフト。カルチョの話でお互い盛り上がっていたので、「じゃあ日本で会おうよ」と軽く声をかけて SNS の連絡先を交換してあることに気づく。

「フォロワー2.2 万人！ってどういうこと？？？」

「あぁ、言い忘れてた。僕、ニューヨークで俳優やってるんだ。ハリウッド俳優ほど有名じゃないけど」って。笑

話が盛り上がったところでスタジアムに到着したためその場で解散となったが、その後も輝かしいプロフィールの彼と連絡を取り続ける中で、4 月某日に京都で会えることになった。

<舞台はミラノから京都へ>

再会の場所は京都駅。到着早々に「Aki, うちの両親を紹介するよ」とのことで駅近くのホテルへ。家族旅行を兼ねていると聞いていたので何ら不思議には思わずついて行き、ザ・イタリア紳士と握手して挨拶を交わす。

「どこかで見たことある人だな」と思っていたら、ヤコポが「父さんはジャーナリストだよ、Corriere della Sera の」とのたまうではないか。

差し出された名刺を見て思い出したのだが、目の前にいた紳士はフェデリコ・ランピーニ氏！同紙のニューヨーク論説委員を長きにわたって務める著名人で、前日は東京のイタリア文化会館で対談イベントに出席していたとのこと。むしろ、京都までの移動の車中で彼のインタビュー映像をたまたま見ていたのに、ファミリーネームのことがすっかり頭から抜けていてまったく気づかなかった。笑

なお、日本在住だと聞いていたヤコポの親友のアメリカ人・ベンも合流。聞けば福岡在住でこのために京都に駆けつけたとのこと。福岡県で生まれ育った私とはもちろん共通の話題がたっぷりで、さらに奇跡が重なっていく。

福岡生活 8 年目ということで流暢に日本語を操るだけでなく、学生時代に学んだフランス語も使いこなす（フェデリコさんとは時折フランス語まじりで話していた）。マルチリンガルスピーカーが集まった結果、イタリア語・英語をベースに時々フランス語と日本語が飛び交う、世にも不思議なティータイムが始まったのである。

今後の予定の話になり、これから家族旅行で 10 日間日本に滞在してミラノに向かうとのこと。親子で共同執筆した著書の出版に向けた最終調整があるという。

ヤコポ:「日本からミラノまで、親子バラバラに移動するんだよ」

フェデリコ:「私は ANA の直行便で午後着だったかな」

ヤコポ:「僕は香港経由でミラノに早朝到着するんだよね、たしか 15 日」

山田:「ん、4 月 15 日の早朝着ってことよね？」

ヤコポ:「そうだね。ひょっとして…」

毎年恒例のパスクアでの国際大会出場をメインとしたアカデミーのツアーを控えていた私。13 人の教え子たちを連れて日本を離れてミラノ入り（ドーハ経由）するのが、なんと彼らと同じ 4 月 15 日だったのである。

ヤコポが子どもの頃からミラニスタだったのは既に聞いており、私たちもミラノ入りした初日にクラブオフィスを訪問する予定になっていた。「一緒にクラブオフィス行く？」というオファーを彼は快諾。私とほぼ同世代で、13 歳で生活の拠点がニューヨークに移った彼にとって、2014 年に完成したクラブオフィス・Casa Milan は未知の世界でもある。

ミラノでの出会いが京都での再会につながり、また交流の矢印がミラノに戻っていく。あまりに続く偶然の連鎖に驚きを隠せずにいたヤコポのお母さんの顔が忘れられない。

<日本人がイタリア人ミラニスタをおもてなし>

そして迎えた 4 月 15 日、舞台はイタリア・ミラノ。今年は「無事に」到着することができた。昨年の春のツアーでは、機材トラブルによりアルマトイ（カザフスタン）に緊急着陸というトラブルに遭遇。待機と追加フライトの影響で 12 時間遅れで到着したため、Casa Milan を訪れることができなかったのである。（まぁ、経由地であるドーハへの到着が 1 時間遅れたため、トランジット時間が 30 分しかなく、全力疾走するハメにはなったのだが）

一方、ヤコポが搭乗する香港発ミラノ行きのフライトが遅延したとのこと。みんなで一緒にミュージアム見学はできなかったが、交流スペースで遊ぶ子どもたちにも紹介することができた。当然、「ねぇ、コーチこの人誰？」と聞かれるわけだが、経緯の説明がなかなか難しい。

「40 歳ラスト 5 日でできた友だちだよ」

「この前初めてミラノの地下鉄の中で話しかけてくれて、京都でまた会って友達になったの」

「たまたま同じ日にミラノに来ることになって、また今日会ってるんだよ」

「偶然ってすごいだろ？」

「ん、意味分かんないって？オレもだよ。笑」

偶然の連鎖のおもしろさを理解したやさしいクラブスタッフの協力もあり、私も同伴する形でミュージアム “MUSEO MONDO MILAN”ツアーへとご案内。もちろん、イタリア人である彼にガイド通訳はいらない。ほぼ同世代のミラニスタが、幼い頃の記憶を呼び起こしながら数々の展示に目を輝かせている。もう隅々まで展示内容は記憶しているが、今回は彼の少年に戻った素顔をしみじみと眺めるだけで良かった。

偶然の連鎖によって生まれたひと時は感慨深いものがあるが、よく考えれば、日本人がミラノの地でイタリア人ミラニスタをおもてなしするという不思議なひと幕を作り上げていた。

他ならぬヤコポも、このちょっとした違和感には気づいていた様子。私はホテルへ、彼は出版社へと向かう別れ際、25 日間のやりとりを改めて振り返ってまた笑いあった。

直感で思うのは、この手の出会いは必ず濃くて太い絆になるということ。そして、親しい別の誰かにまた繋がっていくかもしれない可能性を孕んでいる。日本とアメリカ、時々イタリア。距離こそあれど、41 歳になった春、偶然によって生まれた友情をしっかりと育んでいきたい。

<確率は何%？！>

さて、もう 1 つの出会いの舞台は、厳密に言えばイタリアではない。全てのコンテンツを消化しミラノを離れ、経由地・ドーハから日本へと向かう機内での話だ。

インバウンド需要はとどまることを知らず、ドーハから関西国際空港までのフライトは満席。通路側を希望するも叶わず中央座席に座ることになった。横には日本人女性が座ることになり、マナーに気をつけなければと思いライトなご挨拶を済ませておく。

離陸してしばらく経った頃に客室乗務員の女性(仮に A さんと呼ぶ)からふと声をかけられる。振り返ると、往路のフライトでもお世話になった方で、たまたま同じ便で乗務されていたのだ。「こんな偶然もあるのか」と思っていたところ、横の女性の方とも目が合ったCAさんが突如として「えーーっ」と声を上げる。

聞けば、隣の席の彼女(B さん)も同業者とのこと。少し長めの休暇をもらい日本に帰国するために搭乗していた。A さんとB さんは、1 度だけ同じフライトで乗務したことがあるみたい。そこで意気投合したのだが、ドーハを拠点に働く日本人の客室乗務員は100 名を超えているため、なかなか同便で働くという機会に恵まれなかったようだ。

お互いの仕事の話で盛り上がる中で、私が触れずにいられなかったのは、前述した昨年のカザフスタン上陸事件。「20 回以上ツアーを動かしてきた中で、まさかアルマトイに着陸するとはねぇ」と口にしたところ、B さんが「ちょっと待って！」と声を上げげた。

「私、そのフライトに乗務してましたよ！！！」

A さんと一緒にかなりデカい声をあげてしまった。こんな偶然があっていいのか。

・週 5 ペースで就航している日本と中東を結ぶ便でダイバートが起こる確率

・その中の二人が、ほぼ 1 年の時を経て、たまたま同じフライトで席が隣り合わせになる確率

いずれにせよ、ごくごくわずかな確率であることに変わりはない(数学者に導いてほしい！)。しどろもどろのアナウンスが記憶に残っていたのだが、当時マイクを握っていたのも彼女(B さん)で、事態を把握できなかったので動揺を隠せなかったという。日本に着くまでの長時間フライト、疲労を忘れていろんなおしゃべりで盛り上がったのは言うまでもない。

<投げたら戻ってくる縁がある>

かつてスペイン人の友人と家族の話をしていた時。ご両親が経営するバルの名前が、"El boomerang"と教えてくれたことがある。「一度外に出ても、また帰ってくる場所にしたいから」という、名付けの理由が記憶に残っている。

元から旅先での出会いを大切にしていくスタンスではあったが、経営者の立場になり「人の縁をつなごう」という意識がより高まったように思う。その積み重ねがいくつかの偶然を生み出し、奇跡的な出会いを導いてくれた。

一歩踏み出した先にコミュニケーションが生まれる。そして、ブーメランの如く「投げたら戻ってくる縁」があることを知った春だった。つながりが生むチカラの極致を見たからこそ、よりよい未来を作る努力を惜しまず、楽しくやっていきたいと思う今日この頃だ。

(AC ミランアカデミー愛知)

**編集・発行 /（公財）日本イタリア会館**
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL：(075)761-4356/FAX：(075)761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/